

亜丁村でタクシーを降りた私が宿泊を決めたのは、宿屋というよりは民宿だった。ダブルサイズの寝台の幅にベニヤ板の壁で仕切られただけの窓の無い部屋は、これまで亜丁で泊まって来た宿に比べればはるかに上等で、安全に眠る事が出来さえすれば満足の私には充分だ。部屋に荷物を置いた私は再び外に飛び出した。完全に日が暮れないうちに、さっき眺めた魅力的な亜丁の村を歩いてみたかった。

三年前、亜丁への立ち去り難い気持ちを抱えてバスの窓から名残り惜しく眺めていた中国の山奥の小さな小さなこの村に、自分が一人で訪れる日が来るなど思いもしなかった。

二度目の亜丁に到着したその日、道端で信じられないような再会を果たしたあの少年もこの村の住人だ。この土地を去る前に是非もう一度会いたかったが、こんな小さな村の事だ。きっと彼のことは簡単に見つけられるだろう。

あたりには紫色の薄闇がひろがり始めていた。先ほどまで村人や子供たちで活気づいていた村は人影も少なくなり、立ち並ぶ家の窓からは小さな明かりがもれているのが見えていた。亜丁村はほんの小さな村だ。村の中ほどにある宿からほんの5、6分程も歩けば村のはずれまで出てしまう。今日一日の登山の疲れもあり夕暮れの村のただすまいにちょっとセンチメンタルな気持ちになっていると、村はずれの一軒の家から素朴な村の雰囲気には場違いな感じのする大音量で音楽が漏れていた。

なんだろう・・・お店かな？

興味を引かれてその家に向かって歩いてゆくと、家の前に立っている少年がこちらに向かってさかんに手を振っているが見えた。

私に手を振ってるの？・・・お店の呼び込み？

引き寄せられるように近づいてゆくと、薄闇の向こうに私が再会を熱望していた亜丁の少年が笑みを浮かべて手を振りながら立っていた。

ええ～！！あなただったのお～！？

全身の力が抜けた。この村で彼を探すのを宝探しの楽しみのように感じていた私だったが、こちらが探そうともしないうちに、会えてしまうなんて。先ほど私が亜丁の村に足を着けてから、まだ数分しか経っていない。

自分の村に突然フラリと現れた私をみても少年は驚いたそぶりもなく、まるでこの日に会うことを約束していたように「待ってたよ～」と笑顔で私を迎えてくれた。

「ここが僕の家なんだ！さあ入って、入って！」

少年に招き入れられた家の中は広い土間の部屋になって

おり、大きなステレオが置かれて音楽が鳴っていた。壁には幼稚園の誕生会を思い出させるキラキラしたモールが巻きつけられ、土間の片端にはテーブルとソファが並べられて、テーブルの上にはビールの瓶がたくさん置かれていた。家族の生活スペースはもっと奥にあるようだ。

「君はとってもいい時に来たよ！今日はこれからパーティなんだ。今から村中の仲間たちがやって来るんだよ」

訳がわからないまま私は勧められたソファに座り、テーブルの上にたくさん用意されていた紙コップに彼がビールを注いでくれた。お酒はあまり飲めないと告げた私に「じゃあ、少しだけ」と彼が注いでくれたビールの泡を舐めながら、私は自分の置かれた状況について行かれずぼっとしてしまった。

今日の成り行きでほんの先ほど亜丁村に着いたばかりだというのに、再び会えるかどうかも判らなかった彼の家のソファに今並んで座っているなんて！そもそも彼と私は何故毎回こうも簡単に出会ってしまうの？思わず何か不思議な縁で繋がっているんじゃないかと思ってしまう。そういえば初めて少年と出会ったあの時も、小屋の前で手を振る彼に招かれて、彼の小屋を訪れたのが始まりだったのだ。

「今日は何のパーティ？」

「明夕後日にはまた成都に戻るんだ。そのお別れパーティだよ。俺が村中の奴らを招待したのさ。もうすぐみんなやって来るよ」

彼の言葉通り、しばらくすると村の若者達が徐々に集まってきた。彼は次々にやってくる友達に私を紹介してくれた。

「彼女は日本人の友達だよ。三年前に会ったんだ」

紹介された彼の友人と話しているうちに、いつの間にか広い土間がいっぱいになるほど若者達が集まっていた。まだ10歳程に見える幼い子供から青年までが並べられたソファにぎっしりと腰掛け、友人の接待に動き回る彼の周りに集まっていた。本当に村中の子供たちが全員集まっているようだ。彼の人気の程が伺われた。

私の斜め前に座っていた、どこか昔の彼を思わせるちょっとり粋がった雰囲気の子は、隣に少年が来ると年上の彼の首に手を回し、身体をぴったりと寄せ合って睦まじく何かを話していた。見るからに仲が良さそうだ。まるで兄弟のように見えた。この村で育った者同士は本当に兄弟のようなものなのだろう。きっと彼の事が大好きなんだろうな。憧れの兄貴分のような存在なのかもしれない。

部屋がいっぱいになるほどお客が集まった頃、少年が土間

の真ん中に進み出て挨拶するとパーティが始まった。

「みんな、今日は集まってくれてありがとう。存分に楽しんでいってくれよな!!」

たぶんそんな事を言ったに違いないその後、少年が何か声を上げると途端にそれまで椅子に座ったり部屋の壁にもたれていた村人達が子供も大人も土間の中央に走り出て、少年を先頭に一列に並びと輪を描きながら踊りが始まった。みんなが声を揃えて歌うチベット族の歌が響きわたり、そろって頭上で腕を回し足を蹴り上げ、身体を回転させる躍動的なチベット族の踊りだ。

この踊りによく似た物を、この四川省の旅で登山メンバー達と別れる前に、皆で訪れた丹巴<sup>タンパ</sup>という村で見た事があった。丹巴は四川省チベット圏の村の中でもことに風光明媚な土地で、民家と自然が美しく調和した絵本の挿絵そのままのような風景には誰もが目を奪われてしまう。その美しさから旅行者も多く訪れる土地柄故、訪れた旅行者に土地の文化や踊りを見せてくれるような場所があったのだ。

あの時の踊りは私達に見せる為の催しだったが、今、私の目の前で行われているのは彼らが自分たちのために踊っている正真正銘の本物だ。歌声につられた様に小走りに家の中に入ってきて、踊りの輪に加わる者もいた。みんな弾けるような笑顔を浮かべている。歌声はますます高くなり、踊りのスピードは増していく。

すごい!!なんて素敵なの・・・!!

大人も子供も一緒になって楽しそうな彼らの様子を見れば、踊りは教えられたものではなく、この村で育ったものなら誰でも普通に踊るようになるのだらうと思われた。きっと何か楽しい事がある度に、折に触れて踊られているのだらう。そんな生活に根ざした喜びや楽しさが力強く発散されている彼らの踊りには民族の誇りさえ感じられた。生活の中に自然にそんな文化を持つ彼らが羨ましく思えた。これが見られただけでも、今日此処に来て本当に良かった～・・・

踊りの輪の先頭に立って皆をリードしている亜丁の少年はひときわ踊りが上手い。まるで光の粒が彼の周りを縁取っているように彼の姿が輝いて見えた。思わずぼーっと彼の姿を追いかける私の目の中には、きっとその時ハートが浮かんでいたに違いない。

彼らの民族の踊りの後は、流行の曲に合わせた今風のダンスになり、次は有志が代わる代わる前に出てきてアカペラで歌うカラオケ大会(?)が始まった。まずは最初に一曲、少年が私も知っている香港歌手の中国語の大ヒット曲を歌った。彼はダンスも歌の腕前もピカイチだ。何をやっても様になる村一番の人気者といった雰囲気だ。

その後は少年がカラオケ大会の司会と進行役を務め、楽しいコメントを挟みながら友人の歌を紹介していたが、最初の

うちは次々と名乗りを上げていた歌手が一通り出揃うと積極的の前に出るものがいなくなり、困った進行役の彼に指名された女の子が恥ずかしがって会場から逃げてしまったところで終了した。

歌が終わってからは歓談タイムだ。少年は集まっている友達の間を忙しく動き回りながらも私に気を使い、皆に紹介したりなるべくそばに居ようとしてくれていた。

そんな時、やはり亜丁村に宿をとっているらしい旅行者が、私と同じように外に漏れている音楽に惹かれ、何をやっているのかと家の中を覗き込んでいる姿を見つけた少年は、すかさず彼ら呼び込んだ。

「入って!入って!遠慮はいらないよ!今日はパーティだから一緒に楽しんでよ!」

呼び込まれたのはおじさん、おばさんと呼ぶには少し年若いくらいの中国人旅行者の男女だ。家に招き入れられたものの戸惑っている二人に少年はソファに座るように勧め、出されたビールを断ろうとした彼らに言った。

「いいから、いいから!お金なんか要らないよ。僕らと一緒に楽しんで!」

そんな少年の姿に、私は三年前に始めて出会った時の彼をダブらせていた。やっぱり彼はそうなんだ・・・。あの日、まだ子供だった彼が、おばさんの集まりであった私達のグループを懸命にもてなしてくれようとする姿に、チベット族は子供の時からしっかりしてると感心していた私だったが、それは少し違っていた。「チベット族が・・・」ではなくて、きっと彼が特別なのだ。相手の年齢や性別を問わず訪れる者をもてなそうという彼のホスピタリティは、この日再会してからの短い時間の間にも端々に感じられ、そんな少年の姿が私は嬉しかった。

今回亜丁を訪れた日から今日まで、私が出会った村人達の殆どは、観光客から少しでも多くのお金を取ることしか考えていない様に思われた。自然の美しさは私を裏切らなかったが、村人達との触れ合いをも求めてこの土地を訪れていた私は、その事に深い失望を感じていたのだ。

この土地が一般に開放される以前はおそらく殆ど現金収入を得る糧も無く、農業や山仕事、牧畜などで細々と暮らしてきたのだらうと想像される村に、ある時から突然観光客が訪れるようになり、ささやかな労働と引き換えに大量の現金が村に流れ込むようになったのだ。そんな環境の激変により、村人達の意識が、変わってしまったのだとしても一概に彼らを責める事はできないが、やはり深い愛着を感じているこの土地で、他所から訪れた人間は単なる金づるとしか思っていないような村人に対峙する度、私はとても悲しかった。

心から再会を喜んだ懐かしい少年も、改めて会ってみればそんな村人達と変わらないのかもしれない・・・長い間心の中で暖めてきた彼の印象が壊されてしまう事に、どこか再び彼に会う事を恐れる感情も抱いていたのだが、こうして実際会ってみれば、私の思い描いていた少年のイメージは少しも壊れていない。汚れた登山服身を着て歳の離れた外国人の私を、自分の友人として大切に扱ってくれる彼に心が温まる思いがしていた。

私がそんな事を思っている時、奥の部屋からノソリと背の高い強面の男の人が出てくるのを見た少年は、慌てて手に持っていたタバコを後ろ手に隠して私の耳に囁いた。

「一番上の兄貴だよ。兄貴の前じゃタバコなんて吸えないよ」

「だってあなた、三年前から普通に吸ってたじゃない」

彼はやんちゃな笑顔を浮かべて言った。

「俺、兄貴だけは怖いんだ」

先ほどの中国人の女性が少年に尋ねた。

「成都の生活はどう？」

「う～ん、あんまり好きじゃない」

18歳という遊びたい盛りの少年にとって、都会は刺激的で魅力にあふれる場所なのではないのだろうか？

「学校を卒業したらどうするの？」

「たぶんここに戻ってくるよ」

「まあ！！成都で学んでからまた此処に戻るの！！」

思わず呆れ声をあげた女性の言いたい事は私にも解った。

こんな山奥の狭い村にいても彼の人生は閉ざされたままだろう。せっかく都会に出て学ぶチャンスを得られたのであれば、広い世界で自分の人生を切り開いて行くべきで、そうでなければ勿体無い。だけど・・・本当にそうなのだろうか？彼がこの土地を愛しているのなら・・・物質的に豊かな生活や人生の成功者になる野心よりも、美しい自然に恵まれた故郷で親しい隣人や家族に囲まれ、穏やかに楽しく自分の民族の文化や風習に即した生活を望むのであれば、それはそれで良いのではないのだろうか？

豊かさや発展を望んで走り続けてきた現代の日本のありようを思いおこせば、幸せのあり方は繁栄の中にだけあるものではないのだとも思えた。そんな事よりも単なる旅行者のセンチメンタリズムからいえば、彼には都会の色に染まらずにいつまでも亜丁の少年で居て欲しいような気がしているだけなのだが・・・

夏休みで亜丁に戻っているとの話だったが、詳しく聞けば彼は体調を崩して咳が止まらず6月頃から村に戻っていたのだそうだ。

「あなたに都会の空気は合わないのね」

私の言葉に彼は深く頷いた。

中国人旅行者達はしばらく歓談した後にお礼を言って立ち去り、いつしか夜も更けていた。

「疲れた？もう帰りたい？」

少年が私の顔を覗き込んで言った。

そういえば今朝は朝の4時からバタバタした上に、サリー達と霧雨の中を宝石の湖まで登山してから亜丁村までやって来たのだ。少年と再会できた嬉しさに疲れなど忘れていたが、さすがにグッタリした顔をしていたらしい。

「うん、そろそろ宿に帰る」

「送っていくよ。ちょっと待ってて」

え？ 送って行くって言ったって、徒歩でせいぜい5、6分なんだけど・・・暫くどこかに姿を消していた少年が家の外から私を呼んでいた。

「準備できたよ！」

表に出るといつの間にか雨が降り始めていた。少年は納屋から引き出してきた小型のバイクに跨り、私に後ろに乗るように言った。

ええ～！！歩いて5、6分の場所にバイクで行くの～！！

思わず苦笑してしまったが、嬉しかった。人一倍強く逞しい女である私は、男性に送って貰った経験など殆どないし、親子ほど歳が離れているといったって、好きな男の子の運転するバイクと一緒に乗れるのだ。三年間忘れることの無かった思い出の少年と劇的な再会を果たし、今日また仕組まれていたのかと思えるほど偶然の出会いをした二人が、雨の降りしきる暗闇の中をバイク二人乗りで走るなんて、なんてロマンティックな～・・・！！

これで少年と一緒に三度目のロマンティックだ。彼に会うと何故いつもこんな素敵な思いをさせて貰えるんだろう。ふと現実に戻って自らを省みれば、自分の事がちょっと恨めしい。こんなに素敵な状況なのに、なぜ私ときたら泥だらけの登山服を着た年増女なんだろう。せめて二十歳の少女なら素敵なロマンスが生まれていたらっておかしくないのに～！！私が内心そんな事を思っているとはつゆ知らずに少年は言った。

「大丈夫？落ちないように僕の身体に捕まって」

私はバイクに跨ると彼の胸に腕をまわし、背中に頭を持たせかけた。顔に降りかかる雨などちっとも気にならない。このまま何処までも走って行けたら良いのに・・・

しかし徒歩5、6分の場所にある宿に、バイクは1分もかからずに到着したのだった。 (次号に続く)